

ただ主だけが神

4:32 さあ、あなたより前の過ぎ去った時代に尋ねてみるがよい。神が地上に人を造られた日からこのかた、天のこの果てからかの果てまでに、これほど偉大なことが起こったであろうか。このようなことが聞かれたであろうか。4:33 あなたのように、火の中から語られる神の声を聞いて、なお生きていた民があったらどうか。4:34 あるいは、あなたがたの神、【主】が、エジプトにおいてあなたの目の前で、あなたがたのためになさったように、試みと、しるしと、不思議と、戦いと、力強い御手と、伸べられた腕と、恐ろしい力とをもって、一つの国民を他の国民の中から取って、あえてご自身のものとされた神があったであろうか。4:35 あなたにこのことが示されたのは、【主】だけが神であって、ほかには神はないことを、あなたが知るためであった。4:36 主はあなたを訓練するため、天から御声を聞かせ、地の上では、大きい火を見させた。その火の中からあなたは、みことばを聞いた。4:37 主は、あなたの先祖たちを愛して、その後の子孫を選んでおられたので、主ご自身が大いなる力をもって、あなたをエジプトから連れ出された。4:38 それはあなたよりも大きく、強い国々を、あなたの前から追い払い、あなたを彼らの地に入らせ、これを相続地としてあなたに与えるためであった。今日のとおりである。4:39 きょう、あなたは、上は天、下は地において、【主】だけが神であり、ほかに神はないことを知り、心に留めなさい。4:40 きょう、私が命じておいた主のおきてと命令とを守りなさい。あなたも、あなたの後の子孫も、しあわせになり、あなたの神、【主】が永久にあなたに与えようとしておられる地で、あなたが長く生き続けるためである。

申命記は、イスラエルの民に対するモーセの一連の説教です。彼らは 40 年間荒野をさまよいましたが、今や、やっと約束の地に入ろうとしています。申命記 1-4 章は、モーセから民への説教の冒頭部分を構成しています。1-3 章では、モーセは再度、民の荒野での旅路について、そしてそこで経験した勝利について触れています。モーセの説教は、応用を含ませつつ 4 章で終盤へ向かいます。4 章 1-14 節では、モーセは民を従順へと召し、15-31 節では決して偶像や神々を持ってはけないと教えています。今日の聖書箇所を見てみると、ここにもまた同じテーマがもう一度強調されているのを見て取れます。けれども、今日の箇所ではモーセが焦点を置いているのは、「民は【主】がどのようなお方であるのかということに集中しなければならない」ということでしょう。イスラエルの民は何度も何度も繰り返して、主がどのようなお方なのかを思い出すようにされています。そして実はそれが今朝学ぶことの中心部分でもあります。私が思うに、この聖書箇所が教えていることは、この一文に要約されます。「モーセは、主がどのような方であるのかということのゆえに、民を従順へと召した」ということです。私達もまた、主に従い、主がどのようなお方なのかを覚えるように召されているのです。イエスにおける信仰以外、神は私達に何もお求めにならない、と多くの人が言うのを聞いたことがありますし、信仰は行いではないから、私たちは何もしなくても良い、教えられています。クリスチャン生活の全てを簡単に表現してしまうなら、ある真理を信じて回心することです。けれども、それは新約聖書で述べられているクリスチャン生活の考え方とは相容れないものです。

聖パウロの手紙を何気なく読んでいても、イエスを信じて救われることに加えて、クリスチャン生活で私たちがすべきことがあることを確信すべきです。しかし聖書は、イエスがご自身の民のために成し遂げた、完全で満ち満ちた救いというシンプルな福音のメッセージを断言しているのも確かです。私たちは、いつもイエスの十字架上の死だけが私たちの救いに必要なものであると断言したいものです。ここで私たちの課題となるのは、従順とは何なのか、どうして神に従わなければならないのか、ということ。申命記 4 章 32-40 節は、私たちクリスチャンがなぜ神の戒めに従うべきなのか、なぜ従順が良い事なのかを理解する手助けをしてくれます。今朝皆さんにお届けしたいメッセージは、「主がなされたことのゆえ、また主がどのような方なのかのゆえに、私たちは主に従うべきである」ということです。今日のメッセージが皆さんにとってクリスチャン生活を歩むための励ましになることを祈ります。

主がなされたこととは何でしょうか？ (32-38 節)

旧約聖書の中心的出来事といえば出エジプト記です。奴隷として生きていたのに、突然に戦うこともなく世界でも最強と言われる国から解放されることを想像してみてください。荒野から一步一步導いてきてくださったのは、奴隷としての苦役から彼らを救い出されたその同じ神であるということ。モーセはイスラエルの民に思い出させています。神は、火の中からモーセに話しかけられました (33 節)。そして、エジプトから力強い御業で民を導き出してくださいました (34 節)。神はただ彼らを奇跡的な方法でエジプトから導き出しただけではなく、このようなことを今まで成し遂げたことがあるのは神のみであるというその神格をもお示しになりました。古代の伝統でも、また近年の宗教でさえも、神々は多くの場合、地図上の特定の場所に宿ると考えられてきました。つまり、ある地域の出身の人はその地域の神格を、また別の地域の出身の人はその地域の神格を信じるのです。イスラエルの民をエジプトから導き出された神はそのような神ではありません。モーセはこのように言いました。「主がなされたようなことを行った神が今まであったらどうか」と。その答えは明らかに「ノー」です。そしてほとんどの宗教は、その宗教で選ばれた人たちと一般の人たちの 2 つに分けられています。数人の特別な人たちだけが「神」と関わることができ、他の人は聖職者からの情報を得るだけです。これは、イスラエルの民の場合とは異なります。彼らは神が山から語られるのを聞きました。そして、神の火を目にしました (36 節)。35 節でモーセは、これらの奇跡的な出来事はすべて、主がただお一人だけであるということ。民が知るようになるためになされたのだと述べています。真の神はただお一人だけなのです。他の宗教で様々な現象や超自然的な体験があったとしても、真の主がなされたようなことをした神は他にはないのです。37-38 節では、モーセは民に 2 つのことを教えています。まず 1 つ目は、主がこれらのことをなされたのは、契約の愛のゆえであること、そして 2 つ目に彼らのために神が将来を用意してくださっているということです。契約の愛とは、神が民を守り、民のために備えて導くことを約束され、それゆえに民は神ご自身のものとなり、神が彼らと歩むことができる、というものです。神の契約の愛には有効期限がありません。これは、神の永遠のご臨在 (ご性質) に関係しています。ですから、神の民の将来は神のご性質ゆえに確固たるものなのです。神はご自身がなされると言われたことを必ず行われる方であると、神の民は確信を持つことができます。それは、神が既に民のために成し遂げられた驚くべき出来事のゆえにです。イスラエルの民に将来を約束する神の契約の愛は、今のクリスチャンが簡単に共感できるものです。それは、福音が私たちに与える希望と同じ希望です。イエスを通して、イエスとイエスのなされたことゆえに、クリスチャンは民がエジプトを出たように自分自身の解放を経験す

るのです。罪における捕虜の状態から、神の御国における自由への解放です。3年半の間、イエスの弟子たちは神の声を聴き、たくさんしるしの証人となりました。新約聖書にある弟子たちの教えは、旧約聖書のイスラエルの民に対して書かれた教えと同じです。神のなさることが、神の民のために、神の靈感によって記録されたものだからです。イエスは、イスラエルの民をエジプトから導きだされたのと同様のことをなされました。イエスは私たちを暗闇の夜から導き出し、帰るべき場所を与えてくださったのです。

主とはどなたでしょうか？（39節）

「4:39 きょう、あなたは、上は天、下は地において、【主】だけが神であり、」の部分は、主がどのような方であるかを大変力強く宣言している部分です。英語の聖書に注目すると、「主」を指す部分が大文字で“LORD”と表現されていますよね、日本語の聖書でも【主】と表記されています。皆さんもご存知かと思いますが、この表記の意味は、ヘブル語の聖書ではこれらの箇所神に対する特別な名前が使われているということです。「ヤハウェ」は神です。ヤハウェは天と地における神です。主は特定の国の中だけで主権をふるうような、地域限定のお方ではありません。主は万物の上にあられる方です。主は天をすべて治め、地を治められる方です。今まさしく他の国々との戦いに立ち向かおうとしていたイスラエルにとってこれを心に留めておくことは重要でした。他の国々は、自分たちが治める土地は自分たちの神々によって与えられた土地なのだから、自分たちにその土地に対して権利があると主張しました。そしてその神々が彼らのために戦うというのです。旧約聖書を読むと、「神が民のために戦われる」と書いてあったり、また異国の兵にイスラエルが攻撃された時に、「神の御名によって民を守ってください」と預言者たちが神にさげぶ様子がみられたりするのはそれと関係しています。世界の古代の神々は、境界線を守る神でした。イスラエルの近隣の諸国民は、自分たちの神がそこにいるがゆえにその地域に住んでいたのです。【主】は違います。主は真の神です。主は全地を治めておられます。世界とそのうちにあるすべてをお造りになったのです。主は国々が起こるのも墮ちるのもその手におさめておられます。神が一つの国を存在させるのは、神がそうしたいと思われたからです。神が万物をお造りになったのであれば、何が主の御力の範疇外にあるというのでしょうか。もちろん、神の知識や御力に勝るものはありません。神はいつくしみと真理、美しさにおいてこれ以上ない理想なのです。

39節では、モーセは「心に留めなさい」と民に教えています。これは何を意味するのでしょうか？主は、素晴らしく崇高な神です。私たちの神に関する知識は神がどのような方かということに影響を与えません。けれども、私たちが日々経験することへは影響を与えるでしょう。もしも、主が上は天を、下は地を治める神であるという真理に従って人生を歩むなら、私たちの生活にどのような違いを生み出すのでしょうか？神は万物を治める方です。神の御力と知識、いつくしみ、真理、美しさは完全です。このような神学的考え方は、日々の生活に違いを生み出さないかのようにも思えます。

私は、神の御力への確信が、道を歩いていてつまずいたり転んだりすることを防ぐとは思いません。神の知識に信頼することで病気を防ぐことができるとも思いません。神への確信は、約束の地でイスラエルが戦わなければいけない状況を変えることはありませんでした。けれども、私たちが日々直面する戦いも、国を建てることのおできるになるほどの力を持つ神の前に立ちはだかることができるほどのものではないのです。私たちが自分の環境ではなく神に確信を持つ時、つまり厳しい状況の中でも、まず神は素晴らしいお方で、ご自身の民を愛される方であり、すべてのことを御手に収めておられるのだと思

える時、私たちは「心に留め」ているのです。私たちの身代わりにご自身の御子を死にまで渡されたのと同じ神は、私たちをその厳しい状況の中でもお見捨てになるようなことはないのです。「心に留める」という召しは、モーセがカナンの地に入る準備をするにあたってモーセが口にした言葉です。民はその時、まさしく身体的にも霊的にも戦いの時を迎えようとしていたので、主が支えてくださるということを心に留めることを何度も何度も思い出させてもらう必要がありました。彼らの直面した戦いは身体的戦いでしたが、それは同時に霊的な戦いでした。なぜなら、彼らの行動は主の命令を真剣にとらえているかどうかを示すことになったからです。【主】が彼らに約束された地に入って行くにあたって【主】がどのようなお方であるかを思い出すことはその地を所有するためのカギとなることでした。この聖書箇所にある歴史的な状況は私たちにとっては少しかけ離れたような状況です。けれども、【主】に完全な確信を置くということについては、私たちにとってもかけ離れたことはありません。クリスチャン生活の必須部分です。私たちは主イエスというお方とその働きに目を向けるのです。神がナザレのイエスという人として受肉されました。イエスは完全に、そして完璧に神でしたが、完全に人間であったのです。イエスは、御父に完全に従い、罪のない人生を送られました。神の計画に従い、犠牲を払って死なれました。そして死からよみがえられました。イエスは天に上げられ、御父の右の座についておられます。そして私たちの慰めと導きのために聖霊をお送りになったのです。イエスは私たちの罪を赦され、御父の御前で正しい者としてくださいます。私たちの信仰の創始者であり完成者であるイエスに目を向け、イエスがどのような方であるのか、どのようなことをなされたのかを覚えましょう。

ヘブル 12:2 「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。」

人生で苦境に立たされ押しつぶされそうになる時、三位一体の神がなされたこと、今なされていること、そしてこれからなされるすべてのことを思いましょ。この世での私たちの心配事、恐れ、悲しみ、そして労苦はすべて、瞬く間に過ぎ去ってしまうものです。どんな力や拒絶、誘惑が全能の主の上に行くことがあるのでしょうか。私たちの主イエスが、イエスの尊い民である私たちのためにそこにおられるのです。それを心に留めましょ。

「私たちは主に従うべきである」(40 節)

40 節には、「きょう、私が命じておいた主のおきてと命令とを守りなさい。」とありますが、神の働きと本質が私たちの従順とどのようにつながっているかが皆さんにとって明らかであることを願います。全能の三位一体の神はイスラエルの民を救われ、今まさに彼らを約束の地へと連れて行こうとされています。ですから民は神の命令に従わなければなりません。神はご自身の民を愛しておられ、既に救ってくださいましたから、彼らは神の民として神の命令に従わなければなりません。民は神の支配の下におり、神の御名によって呼ばれます。彼らは神の子どもなのです。私たちクリスチャンにも同じ考えが適用されます。私たちは神に属し、神は私たちを愛してくださっています。ですから、私たちは従わなければなりません。けれども、私たちが苦戦するのは、どの命令に従う必要があるのかを見出すことです。旧約聖書には多くの立法がありましたし、新約聖書にもいくつも命令があります。イエスは、立法と預言の数々をマタイ 22 章 34-40 節でまとめられ、神を愛し、隣人を愛せと命令されました。

このことを考えるだけでも時間を沢山かけることができます。そしてそうすることは私たちの益にもなりますが、イエスが強調されたことは、イエスの内に示された恵みと愛をまっとうすることを追求することではないかと私は思います。何も自分の努力で神から得ようとする必要はありません。神の要求を満たすために神の立法に従う必要もありません。私たちの主イエスが私たちのためにそのすべてをしてくださりましたから。私たちが神に従うのは、三位一体の神が現実のものだからです。神は聖く、正しく、全能のお方です。神は数えきれないほど沢山のことを私たちにしてくださっています。私たちに忍耐強くあられ、哀れみ深くあられます。神によって与えられたすべての愛のゆえに、私たちは神がおっしゃることに耳を傾けることで神を愛するのです。私たちは、謙虚さと知恵の道を歩むことで、唯一の、真の神を礼拝します。私たちの救い主を真似るのです。

40節の後半には「あなたも、あなたの後の子孫も、しあわせになり、あなたの神、【主】が永久にあなたに与えようとしておられる地で、あなたが長く生き続けるためである。」とあります。この箇所は、神の命令に従えば長生きする、と言っているように思えます。ですが、この箇所ではイスラエルの民がまさに新しい土地を征服しようとするその瀬戸際にいたことを思い出さなければなりません。私たちは同じ立場にはありません。けれども、その原理はイスラエルに対してそうであったように私たちにもあてはまります。私たちが神の命令に注意深く従うなら、私たちは多くの場合祝福され、知恵に満ちた生活を送ることでしょう。神の御声に従うことが私たちの日々の生活に知恵を与えるのは明らかです。またそれは難しい選択をしなければならない時に確実に助けとなるでしょう。事故から完全に守られ、隣人よりも長生きすることが保証されているわけではありません。イスラエルの民は与えられ得る年数最大限生きるという約束を受け取ったわけではありません。むしろ、神に従うならば立法の呪いに置かれることはないという確信を受け取ったのです。旧約聖書では、立法の呪いが様々な方法で成就しましたが、新約聖書の時代にあつて、私たちは主イエスにおいて、すべての必要が満たされることに確信を持つことができます。「主はその愛されるものを懲らしめられる」というのが、たとえ苦しい状況にあつても神と神の恵みから私たちは決して遠く離れてしまっているのではないという確信となります。

従順と信仰：まとめ

クリスチャンとして、私たちは決して神から遠く離れることはありません。私たちは、私たちを導く聖霊を与えられています。私たちには祈りがあります。神の御言葉があります。そして神の教会があります。神はあなたの近くにおられます。誰かが「神をあまり近くに感じない」とか「神を遠く感じる」と言うのを聞いたことがありますか？主から離れてしまうこともあると私たちの経験が語ります。

自分は本当に主と共に歩んでいるのだろうかと自分に問いかけることがあります。ですがこれは、日々私たちが神から受け取る恵みにおける確信を弱めてしまうものだと思えます。聖書、祈り、教会、洗礼、聖餐、そして聖霊は、私たちが自分で稼ぐことのないあふれんばかりの賜物です。これらはすべて与えられたもので、これらは私たちを神へと近づけます。何よりも、私たちは、今の自分の感情が、信者として既に受け取った真の恵みを変えることはないと覚えておかななくてはなりません。一方で、神から離れているように感じることは、神の命令に従うこととつながっているとも思えます。エデンの園で実例を見ることができます。アダムとエバは、園で神にさからい、神から自分たちの身を隠しました。彼らは、神が後にしてくださったように、自分たちに衣を着せてくださる確信がありませんでした。けれども、私たちは、罪を言い表すなら、神が私たちを赦し、私たちを回復してくださるという神のみ言

葉に確信を持つことができます。主、御父、子、聖霊は唯一の、真の神です。万物の創造主であり、人類の贖い主です。私たちの主イエスは私たちのためにご自身を十字架につけられたのです。

私たちは暗闇の王国からキリストの御国へと移されたのです。

—コロサイ 1:13 「神は、私たちを暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。」

今教会として体験しているように私は天の御国の民なのです。そしてある日すべてがひざをかがめ、すべての口がイエスが主であると告白する時、それが一部の人にだけでなく完全に明らかにされるのです。

—フィリピ 2:9-11 「2:9 それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。 2:10 それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ、 2:11 すべての口が、「イエス・キリストは主である」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。」

あなたがキリストとその愛にしがみつくなれば、神を愛し、隣人を愛するためにキリストの命令に従いたいと思うことがどんどん容易になってくるはずです。

けれども、今日皆様にお薦めしたいのは、過去の失敗のゆえに打ちのめされたように感じたり、憶病な思いで従うことではありません。いいえ。その代わりに、主イエスを思い起こしてほしいと思います。イエスはどのようなお方なのか？イエスは何をなさったのか？そのことにしがみついて、イエスへの従順において人生を歩みましょう。